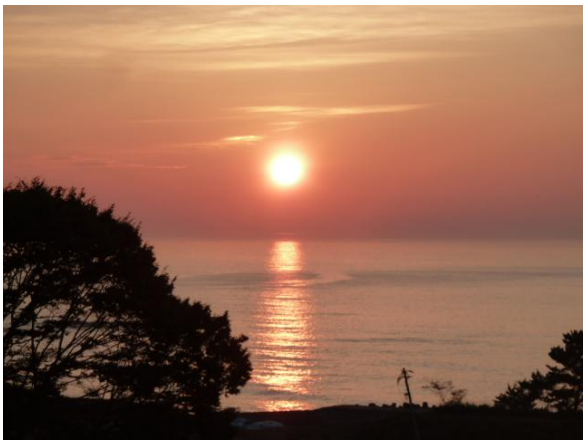
気仙沼津谷大沢地区レポートその2

９月９日～10 日、復興に向けた新しい公共の場づくり協議会気仙沼事務所でボランティア支援とワークショップ、朝８：３０フローラＳＡＧＡＥに集合していざ気仙沼へ、車内から見る被災地初めて見る人が多く、車内に何とも言えない声が・・・。

総勢 13 名、泊ってわかったのだがこのぐらいがちょうどいいのかも、ほとんどが福岡の人、その他に大分 1 名、福島 1 名、山形 3 名、若い人も交じってである、若い女性が目立つのも時代の流れか。

草むしり、みんなでやり終えた後、地元の人から「ありがとう」で少しだが気持ちに触れ合えたような気がするし、年甲斐もなく「やった」と軽くつぶやく。

夕方からワークショップ、地元振興会の方からあいさつと状況説明などを、地域づくりの支援をとの言葉に、期待に押しつぶされそうになるが腰を据えて向き合わなければ、参加者からも何故ここに来たのかに始まり、今何を思うのか、どう関わっていけるのか、どういう形で支援をするのか・・・発言を、一人ひとりの気持ちを大事にする、一人ひとりに向かって自分たちができることを、参加者からの言葉。



この地で見る星空も朝日もきれい、みんなが揃って見ることができるのはいつのことであろう。

朝メモを取りながら、地元の方とあいさつを交わす、我々のことは知っているようで少し話をする、その時の様子を、一人ひとりどうだったのか、どう対応したのか・・、災害記録としてまとめられる、お手伝いできればと思う。

ワークショップは次の日も続く、これまでのまちとしての歩み、そして震災、そして平成２年の国体の時に民家でお世話した経験が「民泊方式」（49世帯、138人）の避難所へと、計画的支援物資の配布など５月31日の災害対策本部解散までの取り組みの話、靴のサイズはある程度想定できたがブラジャーのサイズは１軒１軒聞いて歩いた、こうもり傘は駅の忘れもの・・・、今は冬の衣類などを。
必ず戻ってもらうために、「振興会」（まちづくりの核、旧本吉町を40に分けており、この地区は浜地域振興会に属する21区である）は今こそ総力を結集して地区の復旧・復興に取り組み「新しい大沢」の建設を目指す、強い決意である。
今回の震災、生活再生・産業再生、そこの支援が大事となる、ボランティアができる範囲を超えているのかもしれないが、これまでとは違った災害ボランティアが求められていることは確かである。

帰りは気仙沼の街なかを、参加者から「これはひどい」と・・、最後よりも先に案内した方が良かったのかも、山形泊まりなので屋台村に案内、酒を酌み交わしながら一人ひとり何ができるか・・・、やはりこの話になってしまう。

忘れ去られようとしている？まだ全国からボランティアの申し込みがあると聞く、まだ多くの方々が何かできないかと思っているし、来たいと思っている。